<table>
<thead>
<tr>
<th><strong>Title</strong></th>
<th>民家の風土性-住空間の史的展開過程に関する研究（その12）- Climatic study on our farmers’ dwellings</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>Author(s)</strong></td>
<td>島村 昇（Shimamura Noboru）</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Citation</strong></td>
<td>生活科学論叢（Review of Living Science），No.28:1-25</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Issue Date</strong></td>
<td>1997</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Resource Type</strong></td>
<td>Bulletin Paper / 紀要論文</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Resource Version</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>URL</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Right</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Additional Information</strong></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
# 民家の風土性

——住空間の歴史的展開過程に関する研究（その12）——

島村 昇

<table>
<thead>
<tr>
<th>目 次</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 農家の風土性</td>
</tr>
<tr>
<td>1.1. 日本列島の風土性</td>
</tr>
<tr>
<td>1.2. 農家規模の地域差</td>
</tr>
<tr>
<td>1.3. 農家規模の地域的風土性</td>
</tr>
<tr>
<td>1.4. 北陸的風土の特色</td>
</tr>
<tr>
<td>1.5. 秋冬季降水量と農家規模</td>
</tr>
<tr>
<td>1.6. 冬季気温と農家規模</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2. 農家住空間の風土性

2.1. 農家住空間の決定因

2.2. 農家の民家型

2.3. 農家・サービス系空間の風土性

2.4. 農家固有のサービス系空間

2.5. 農家・リビング系空間の風土性

2.6. ヒロマ型民家のヒロマと諸室
1. 農家と風土性

1.1 日本列島の風土性

農家に限らず建築の第一義的役割は温帯風雪から身をはさんで人工的な空間を獲得することである。農家もまた例外ではない。寒帯風雪の気候風土はいやおうなく農家に多大の影響を与えているであろう。本論の対象とする加賀・農村住居が広いヒロマやドマをもつに至ったのも多雨多雪な気候風土のせいである。本論ではこのような農村住居を大ドマ・ヒロマ型と称しているが、全国的にみるとこのような気候風土との関連でいくつかの民家型が存在する。

さしあめ日本列島の地理的条件をみると、列島は南北と約2,000kmの長さにわたり、北の北海道と南の沖縄では気候ひとつをとっても大きな差がある。北海道・札幌の年平均気温は8.0℃であるが、沖縄・那覇では22.4℃でその差は14℃を超える。

また、日本列島は中央部に限く背葉山脈が走り、いわゆる表日本と裏日本の2つの地域に分断している。とくに冬季の日本海をはるし月明風は裏日本に多量の雪を降らせ、表日本では晴天がつづく。こうして裏日本の多雪地帯、豪雪地帯と表日本の少雪地帯が対照的な風土性を示す。

以上の寒暖の差や降雪の多寡は、いまだもしくはシェルターとしての住居建築に多大の影響を与えなきにかならないであろう。温暖少雪な地域では、戸外空間の利用度も高くシェルターとしての住居建築は比較的規模でもることもある。これに対して、寒冷多雪な地域ではシェルターの需用度は一時と高く大規模化させるを得ないであろう。本論の対象とする加賀・農村住居が大ドマ・ヒロマ型の住空間を発達させたのもこうのやることであった。

ちなみに、日本列島の気候風土性については気候区の分類があり、それは南から北に向けて、
①南方気候区、②南海気候区、③瀬戸内気候区、④山陰気候区、⑤東海気候区、⑥内陸気候区、
⑦北陸気候区、⑧東北気候区、⑨北方気候区、⑩北海気候区の10気候区である。

1.2 農家規模の地域差

シェルターとしての住居建築の規模は、まずはその床面積に現われる。全国各地域（都道府県
単位）の農家規模を住宅統計調査結果（昭和43年・1968）の農林漁業併用住宅の延べ面積でみる
と大きな地域差がある。その状況は次のようなである。

60m²台 —— 1地域（鹿児島）
70m²台 —— なし
80m²台 —— 1地域（宮崎）
90m²台 —— 4地域（北海道、茨城、徳島、長崎）
100m²台 —— 6地域（千葉、和歌山、愛媛、高知、熊本、大分）
110m²台 —— 7地域（栃木、東京、神奈川、静岡、島根、岡山、福岡）
120㎡台——9地域（青森、三重、滋賀、京都、大阪、鳥取、広島、香川、佐賀）
130㎡台——5地域（宮城、山形、福島、埼玉、山梨）
140㎡台——5地域（岩手、長野、兵庫、奈良、山口）
150㎡台——3地域（群馬、福井、愛知）
160㎡台——3地域（秋田、新潟、岐阜）
170㎡台——1地域（石川）
180㎡台——なし
190㎡台——1地域（富山）

全国46地域（当時は沖縄復帰前）の農家規模は上記のように60㎡台から190㎡台まで大幅な差をもって分布している。最小の鹿児島は64㎡（住宅統計調査数値小数1位4捨5入、以下同様）で最大は富山の190㎡でその差は実に120㎡以上、倍率にして約3倍である。この規模差はきわめて大きいといわばならない。なお、全国平均は126㎡である。

上記の規模ランク別の地域名をみて明らかたの傾向が読みとれる。すなわち南方の南九州方面は小型で多雪な北陸方面は大型であり、気候風土と農家規模（シェルター規模）とのつよい相関性が感じられるが、先にあげた日本の10気候区との関係はどのようになるのであろうか。次項でそのあたりを検討しよう。

1.3 農家規模の地域的風土性

全国10気候区と農家規模の関係は次のようである。（1つの地域が2つ以上の気候区にまたがる場合は、より多くの面積が属する気候区に所属させる）。

(1) 南方気候区——この時点では沖縄のデータがないが、鹿児島の64㎡、後にみる南西諸島の61㎡から60㎡程度と推定される。
(2) 南海気候区——鹿児島（64㎡）、宮崎（88㎡）、長崎（99㎡）、高知（100㎡）、徳島（98㎡）、和歌山（108㎡）[6 地域単純平均93㎡]
(3) 瀬戸内気候区——熊本（103㎡）、大分（104㎡）、愛媛（105㎡）、香川（125㎡）、広島（120㎡）、岡山（119㎡）、大阪（120㎡）、京都（127㎡）[8 地域単純平均115㎡]
(4) 山陰気候区——佐賀（122㎡）、福岡（114㎡）、山口（140㎡）、鳥取（129㎡）、兵庫（141㎡）、福井（158㎡）[7 地域単純平均131㎡]
(5) 東海気候区——滋賀（127㎡）、三重（126㎡）、愛知（154㎡）、静岡（116㎡）、神奈川（114㎡）、東京（119㎡）、千葉（102㎡）、茨城（95㎡）[8 地域単純平均119㎡]
(6) 内陸気候区——奈良（146㎡）、岐阜（161㎡）、長野（146㎡）、山梨（138㎡）、群馬（150㎡）、埼玉（137㎡）、栃木（114㎡）[7 地域単純平均142㎡]
(7) 北陸気候区——石川（176㎡）、富山（190㎡）、新潟（162㎡）、山形（138㎡）、秋田（160㎡）
5地域単純平均165m²

(8) 東北気候区——福島（135m²）、宮城（132m²）、岩手（142m²）、青森（128m²）[4地域単純平均134m²]

(9) 北方気候区——北海道（98m²）は明治以降に開発された地域で歴史的に他の地域より新しく風土性を充分に反映しているか疑問である。したがって、以下のような農家規模の風土性の考察に際しては北海道を除外する。

以上、日本の気候区と農家規模の関係をみてきたが、気候区によりかなりの規模差がみられる。規模の大きい気候区からあげると、①北陸気候区（165m²）、②内陸気候区（142m²）、③東北気候区（134m²）、④山陰気候区（131m²）、⑤東海気候区（119m²）、⑥瀬戸内気候区（115m²）、⑦南海気候区（93m²）、⑧南方気候区（60m²程度、推定）となる。寒冷多雪な気候区の大型化、温暖少雪気候区の中型化、亜熱帯気候区の小型化がみられる。

本論の対象とする加賀・農村住居は上記の気候区ではいうまでもなく①の北陸気候区に属し、気候区の中では最大規模を誇っている。その最大規模が多雪によるであろうことは容易に推測できるが、しかし多雪でもありさらに寒冷な気候区である③東北気候区よりも大規模であるのは一見矛盾のようにみえる。つまり、降雪量ないし冬季の気温と農家規模との相関関係をいいますごとにみえ、正確に調べてみる必要性が見ようである。

そこで、特に北陸の風土は一体どのようなものなのかを次にみてみよう。とくに冬季が風土の特色を発揮する。

1.4 北陸的風土の特色

北陸的風土の特色については、北陸の地・金沢出身の文学者・室生犀星の具体的な気候描写を引用する。それは次のようである。

十月下旬より時雨となり、十一月はやより三尺も積るは例年の事にして、時には丈余にもなるして、犬等は皆屋根の上にて遊び戯る。雪降れば却って温く、人人は夜越火を囲みて囲炉す。（『抒情小曲集』大正7年発行より）

北陸地方では、ほとんど秋というものがない。10月に入ると縄色の雲が低く重く垂れこめ時雨がやってくる。それはやがて霧となり、霧となって降雪期に入っていく。秋はひとつの季節というよりは冬の前徴としての一時期なのである。犀星文にはさらに次のようにある。

11月になって、ある日、どっと寒さが日暮れ近くにしたかと思うと、急に大ツブなカッキリ
した寒さを含んだ霰になって屋根の上の落葉をたいた。その猛烈な急霰の落ちよう人は声を聞かぬほどさかんであった。私が書院の障子をあけて見ると、川の上におけるや、庭のおち葉をたたきながら傾ねかえる霰は、まるで純白の玉を飛ばしたやうであった。私は毎年この季節になると、ことにこの霰を見ると幽静なる気がした。冬の一時のれらしが重しくかわれるような、慌しく非常に寂しい気をおこさせるのであった。父は茶室にこもりはじめた。
（「性に眼覚める頃」大正8年より）

以上の引用文によって、10月から翌年の2月頃までの気候がよく実感されるが、3月に入っても極雪が残り冬は終らない。おそらく10月から翌年の3月頃までは降雪期をはさんで屋内生活が気候的に要求される。シュルターとしての家屋がその機能を発揮するときである。たんに多雪という自然現象だけでなく、その前後の気象状況も勘案しておかねばならない。これが北陸の気候の特色であり、越冬型民家（大ドマ・ヒロマ型民家）の成立背景である。

1.5 秋冬冬季降水と農家規模

以上のようないく陸的風土の特色は秋季から翌年の初冬にわたる秋冬冬の降水量である。北陸地方民家が全国でトップレベルの規模をもつのもこの降水量と大きくかかわっている。この降水量の多さは屋内生活を余儀なくさせると同時に、農家においては農作業の補助的スペースとしてのドマの必要度をも高めたにちがいない。前者ではヒロマ、後者ではドマの大型化の大きな要因となっているようだ。

【理科年表】により10～3月の秋冬冬季降水量を求めると、この6ヶ月間の平均降水量は北陸地方の4地域が圧倒的に多く、新潟（248mm）、富山（206mm）、石川（240mm）、福井（226mm）である。次に多いのは100mm台で青森（131mm）、秋田（142mm）、千葉（134mm）、神奈川（100mm）、三重（144mm）、滋賀（104mm）、和歌山（175mm）、鳥取（166mm）、鳥取（128mm）、高知（115mm）、宮崎（114mm）、鹿児島（105mm）でこれら12地域の単純平均は128mmである。北陸4地域の単純平均230mmとでは約100mmの大差がある（表1-1）。

その他の29地域は100mm未満でその単純平均は74mmである。これらの地域と比較すると北陸4地域は約3倍の秋冬冬季降水量をもつことになる。先に引用した星野文の時雨、霰、霰、雪の各相態を降水量に換算するとこのような結果になる。

さて、この結果をふまえて秋冬冬季降水量と農家規模の相関を図示したものが図1-1である。このグラフをみても北陸4地域Eグループが群を抜いて降水量が多く農家規模の大きいことがわかるであろう。北海道を除く全国45地域について秋冬冬季降水量W(mm)と農家規模 Af(m2) の相関関係を求めると、相関度は0.3791となる。この値は確実に高い相関度ではないが、図のAグループ26地域について相関関係を求めるが相関度は0.7067となり強い正の相関性を示す。すな
わち、この26地域については秋冬季降水量の多寡が農家規模に与える影響はきわめて強いといわれなければならない。ちなみに、その関係式は \( Af = 0.3314W + 84.41 \) である。

以上の秋冬季降水量相関26地域以外の19地域（図のB、Cグループ）について相関関係を求めると、相関係数は \(-0.4817\) となり降水量との関係においては負の値をとる。つまり降水量の多い地域ほど農家規模は小さいという矛盾した結果を示しているのである。

表1-1 秋冬季降水量、冬季気温と農家規模

<table>
<thead>
<tr>
<th>NO.</th>
<th>地域</th>
<th>农家規模</th>
<th>冬季降水量</th>
<th>农家規模</th>
<th>冬季気温</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>青森</td>
<td>128</td>
<td>131</td>
<td>24 汐賀</td>
<td>127</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>岩手</td>
<td>142</td>
<td>81</td>
<td>0.4</td>
<td>25 京都</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>宮城</td>
<td>132</td>
<td>67</td>
<td>3.7</td>
<td>26 大阪</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>秋田</td>
<td>160</td>
<td>142</td>
<td>2.2</td>
<td>27 兵庫</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>山形</td>
<td>138</td>
<td>84</td>
<td>0.4</td>
<td>28 奈良</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>福島</td>
<td>135</td>
<td>66</td>
<td>3.7</td>
<td>29 和歌山</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>岐阜</td>
<td>95</td>
<td>80</td>
<td>5.1</td>
<td>30 島根</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>愛知</td>
<td>114</td>
<td>65</td>
<td>4.3</td>
<td>31 鳥取</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>群馬</td>
<td>150</td>
<td>47</td>
<td>5.5</td>
<td>32 岡山</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>埼玉</td>
<td>137</td>
<td>58</td>
<td>5.8</td>
<td>33 広島</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>千葉</td>
<td>162</td>
<td>134</td>
<td>8.6</td>
<td>34 山口</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>東京</td>
<td>119</td>
<td>92</td>
<td>7.5</td>
<td>35 徳島</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>神奈川</td>
<td>114</td>
<td>100</td>
<td>7.5</td>
<td>36 香川</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>新潟</td>
<td>162</td>
<td>248</td>
<td>4.7</td>
<td>37 愛媛</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>富山</td>
<td>190</td>
<td>206</td>
<td>5.0</td>
<td>38 高知</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>石川</td>
<td>176</td>
<td>240</td>
<td>5.7</td>
<td>39 福岡</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>福井</td>
<td>158</td>
<td>226</td>
<td>5.3</td>
<td>40 佐賀</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>山梨</td>
<td>138</td>
<td>59</td>
<td>4.7</td>
<td>41 長崎</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>長野</td>
<td>146</td>
<td>63</td>
<td>1.2</td>
<td>42 熊本</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>岐阜</td>
<td>161</td>
<td>98</td>
<td>3.0</td>
<td>43 大分</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>静岡</td>
<td>116</td>
<td>99</td>
<td>8.7</td>
<td>44 宮崎</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>愛知</td>
<td>154</td>
<td>75</td>
<td>6.4</td>
<td>45 鹿児島</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>三重</td>
<td>126</td>
<td>144</td>
<td>7.6</td>
<td>平均</td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料）『住宅統計調査報告』（昭和43年・1968）および『理科年表』
注）1. 地域については北海道を除く 2. 農家規模は農林漁業併用住宅の延べ面積（小数1位4捨5入） 3. 秋冬季降水量は10〜3月の月平均降水量の平均 4. 冬季気温は11〜2月の月平均気温の平均
図1-1 秋冬季降水量と農家規模の相関

注) 1. 秋冬季降水量は10～3月の降水量の月平均値、『理科年表』による。
2. Aグループ（26地域）については、相関度
\[ r = 0.7067, \quad A_f = 0.3314W + 84.41 \]
1.6 冬季気温と農家規模

秋冬降水量と正の相関を示さない19地域（岩手、宮城、栃木、群馬、山梨、長野、岐阜、愛知、京都、大阪、兵庫、奈良、岡山、広島、山口、香川、佐賀、宮崎、鹿児島）については、冬季における寒暖の差が次の因子として働くものと考えられる。冬季の気温ははかり「理科年表」により11月から2月までの4ケ月間の月平均気温の平均をT（℃）とし、農家規模Af（㎡）との相関度を求めると-0.5776となり負の相関関係がみとめられる。つまり冬季気温の低い地域は住居規模が大きくなる傾向にあることを示している。関係式はAf = -5.4706T + 160.94である。

ちなみに、冬季気温と全国45地域の相関関係は、相関係数-0.5716、関係式Af = -5.8672T + 162.60となる。秋冬降水量との相関度0.3791に比べると冬季気温との相関度の方が高い。

次にB、C、Dグループ34地域について冬季気温との相関度を求めると-0.6195となり負の相関性を示す。Dグループは先にAグループに含めて秋冬降水量との相関度0.7067となったところでが、冬季気温との相関を無視できない。

そこでDグループ（15地域）のみについて両者の相関度を求めると、秋冬降水量については-0.2208、冬季気温については-0.6679となり冬季気温との相関の方がはるかに優勢である。この15地域は図によってもわかるように秋冬降水量はすくなく（単純平均85mm）冬季気温の方がつよい因子として働くのであるが、よりマクロなAグループの視点からみれば降水量の因子がよりつよく働いている。

以上によって、Aグループ26地域は秋冬降水量によって、B、Cグループ19地域は冬季気温によって住居規模が決定されている。Aグループ内のDグループ15地域は15地域内では冬季気温の影響下にあるが、マクロ的には秋冬降水量がより大きく作用している。最後に北陸4地域（新潟、富山、石川、福井）のEグループは完全に秋冬降水量因子によって支配されており、全国トップレベルの多雪地域であることがによって最大級の農家規模をもっている。その対照に立つのが亜熱帯型農家の系譜をひく南九州地方、とくに鹿児島であり、この民家型はさらに南西諸島につながっていく。

2. 農家住空間の風土性

2.1 農家住空間の決定因

前節では民家の気候風土性といったところを農家規模の面からみた。住空間の地域性にとって、まずは気候風土と住空間の総量としての規模（全床面積）の関係は、今後その内容をみるための前提条件となる。しかも農家はわが国の住居史においてもっとも深い歴史性をもつ住居種であり、地域の気候風土をその歴史的発展過程の中でもっともつよく反映している住居種と考えられる。

その結果は前節でみたように、多雪地域における大型化、温暖地域における小型化が現象して
した。より具体的には秋冬季降水量と冬季気温の2つの因子と規模の関係をみたのであったが、全国45地域の農家規模は秋冬季降水量の多い地域では雨雪をさけるため大型化し、降水量の少ない地域では中型ないし小型化している。降水量の少ない地域では次に冬季気温が因子として働き寒冷地域では大型化、温暖地域では小型化する傾向を示していた。

こうした農家規模の大小は、きわめてよくその地域の気候風土性を反映しているといえるが、それは結局自然条件によるものといえる。その他方では、地域の経済力（主として農業生産力）や住居観（とくに住居建築に対する投資志向）等の社会的条件も作用するものと考えられるが、かりにこの社会的条件として持家と借家の割合をみると、全国2,116,600戸の農家（農林漁業併用住宅）のうち持家は2,091,800戸（99%），借家24,800戸（1%）で社会的条件がそれほど強く作用しているとは考えられない。また、全国46地域（北海道を含む）の持家率（あるいは借家率）も近似的で地域差はほとんどみとめられない。

自然条件と同時に社会的条件が住居規模につよく作用するの専用住宅であって、ちなみに全国46地域の専用住宅19,461,400戸のうち持家は10,553,500戸（54%），借家は8,907,800戸（46%）で、全国46地域の持家率（あるいは借家率）の地域差は大きい。その意味では農家の規模はすくて気候風土的であるといえる。

2.2 農家の民家型

民家の風土性をまず農家規模においてみたが、次にその内容についてみたが従来の民家研究において民家型の全国分布が示されているので、まずそれを参考とする（図1-2）。図によると、まず大きくヒロマ型圈と田字型圈に分かれる。ヒロマ型圈は北海道より東北地方に分布し、寒冷多雪地帯とよく一致している。ヒロマ型は炉のあるヒロマを中心とする住空間構成が特色で、多雪型民家あるいは越冬型民家といえる民家型である。

ヒロマ型圏の中には部分的にチュウモンヅクリ（中門造）やマガリヤ（曲屋）などの著名な民家型があるが、中門造は玄関や台所をモヤから直角に突出す民家形態である。曲屋はムワヤ（既）をモヤから直角に突出する民家形態で近世南部藩において発達した。いずれも棟型がL型とさにとるT型（モヤに対して突出部分を2つもリョウツノヤ・両角屋の場合）となる。このような民家形態は、やはり寒冷多雪地域における1棟化過程に生ずる棟型であるが住空間型としてはやはりヒロマ型である。

なお、気候温暖と考えられる九州方面にも局部的にヒロマ型が存在するが、これは山岳地帯で標高が高く冬の寒冷積雪のせいということも考えられるが、ヒロマ1室の原始的単室住居の系譜を今日までひいている民家型とも考えられる。本論第1巻で扱った白山・山村住居との類縁性を感じさせる。この地域も近年まで焼畑農耕をおこなっていたであろう。

他方、田字型圈は関東から西の表日本、四国、九州地方の温暖少雪地帯に対応している。気候
図1-2 気候風土と民家型

温和な地方では、炉のあるヒロハは寒冷多雪な地方に比して需用度が低く住空間の機能分化が優先し田字型のような室構成をとったのであろう。なお、先におこなった農家規模の観点からみると、ヒロマ型圏に属する13地域の単純平均農家規模は152m²で、他の田字型圏32地域のそれは112m²で40m²の差が存する。これによっても、ヒロマ型の大規模、田字型の中規模ないし小規模であることがわかる。

田字型圏も南九州方面で多少状況が異なる。図においてはイエ・ナカエ接着型やフタムネツクリ（二棟造）と称されている民家型である。これらの民家型の分布域は南九州からさらに南方の南西諸島に至っている。否、むしろ南西諸島の民家型が南九州にまで及び、さらに北九州方面にまで波及しているとみるとべきであろう。先にもふれたように、多雪で大型化した北陸方面の民家とは対極的な位置に立つ南西諸島から南九州方面の民家は、本論の対象とする加賀・農村住居、すなわち北陸型民家の特性をより明確にするためにもおろそかにできない。

南西諸島民家については、後に亜熱帯型民家としてとり挙げるが、図において二棟造とよばれている民家型は、ひろく南西諸島に分布する民家型で一般にカマヤ（釜屋）とイヤ（居家）の2
2.3 農家・サービス系空間の風土性

以上、全国的な民家型をみても民家の住空間構成には地域的な差異がある。本論では住空間の内容をみるにあたって、まずはサービス系空間とリビング系空間の空間量や配置手法等について検討することにしているが、ここではサービス系空間の空間量についてみる。

先に住空間として農家規模（全床面積）をみ、地域差の大さいこと、そしてそれが地域の気候風土とよく結びついていることを確かめた。農家においてサービス系空間というとまずドマ空間が想起される。多雪地域ではドマが勢い発達するが、先の図にもあったように南九州方面ではドマは極小である。ドマはうせんサービス系の空間に含まれるので、ドマをも含めたサービス系の空間が地域によってどのようなウェイトをもつのか、そのあたりを検討してみたい（表1－2)。

農家のサービス空間量・Sf(m²)については、全床面積Af(m²)から1住宅あたり畳数に1.65(m²/
畳)を乗じた値・Lf(m²)を引いたものとしている(Sf=Af-Lf)。全国45地域についてAfとSfの相関関係を求めると、相関係数0.9267できわめて強い正の相関がえられる。農家規模・Afが大きくなるにつれてサービス系空間量・Sfも正比例的に増加している。関係式はSf=0.5971Af-5.25である。

このように、農家におけるサービス系空間は全住空間量に正比例しているので大型の多雪型民
表1-2 地域別農家住空間の諸量

<table>
<thead>
<tr>
<th>NO.</th>
<th>地域</th>
<th>農家規模</th>
<th>サービス系空間</th>
<th>室</th>
<th>1室あたり畳数</th>
<th>NO.</th>
<th>地域</th>
<th>農家規模</th>
<th>サービス系空間</th>
<th>室</th>
<th>1室あたり畳数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>青森</td>
<td>128</td>
<td>62</td>
<td>66</td>
<td>5.6</td>
<td>24</td>
<td>滋賀</td>
<td>127</td>
<td>72</td>
<td>55</td>
<td>5.6</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>岩手</td>
<td>142</td>
<td>69</td>
<td>73</td>
<td>5.8</td>
<td>25</td>
<td>京都</td>
<td>127</td>
<td>73</td>
<td>54</td>
<td>5.5</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>宮城</td>
<td>132</td>
<td>64</td>
<td>68</td>
<td>5.8</td>
<td>26</td>
<td>大阪</td>
<td>120</td>
<td>68</td>
<td>52</td>
<td>5.7</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>秋田</td>
<td>160</td>
<td>85</td>
<td>75</td>
<td>6.2</td>
<td>27</td>
<td>兵庫</td>
<td>141</td>
<td>83</td>
<td>58</td>
<td>6.1</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>山形</td>
<td>138</td>
<td>72</td>
<td>66</td>
<td>5.5</td>
<td>28</td>
<td>奈良</td>
<td>146</td>
<td>89</td>
<td>57</td>
<td>5.9</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>福島</td>
<td>135</td>
<td>67</td>
<td>68</td>
<td>5.5</td>
<td>29</td>
<td>和歌山</td>
<td>108</td>
<td>62</td>
<td>46</td>
<td>5.1</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>茨城</td>
<td>95</td>
<td>47</td>
<td>48</td>
<td>4.4</td>
<td>30</td>
<td>鳥取</td>
<td>129</td>
<td>73</td>
<td>56</td>
<td>5.7</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>栃木</td>
<td>114</td>
<td>64</td>
<td>50</td>
<td>4.4</td>
<td>31</td>
<td>島根</td>
<td>116</td>
<td>65</td>
<td>51</td>
<td>5.3</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>群馬</td>
<td>150</td>
<td>99</td>
<td>51</td>
<td>4.6</td>
<td>32</td>
<td>岡山</td>
<td>119</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>5.3</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>埼玉</td>
<td>137</td>
<td>85</td>
<td>52</td>
<td>4.7</td>
<td>33</td>
<td>広島</td>
<td>120</td>
<td>65</td>
<td>55</td>
<td>5.5</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>千葉</td>
<td>102</td>
<td>51</td>
<td>51</td>
<td>4.7</td>
<td>34</td>
<td>山口</td>
<td>140</td>
<td>88</td>
<td>52</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>東京</td>
<td>119</td>
<td>68</td>
<td>51</td>
<td>4.9</td>
<td>35</td>
<td>徳島</td>
<td>98</td>
<td>47</td>
<td>51</td>
<td>5.3</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>神奈川</td>
<td>114</td>
<td>62</td>
<td>52</td>
<td>4.7</td>
<td>36</td>
<td>香川</td>
<td>125</td>
<td>83</td>
<td>42</td>
<td>4.6</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>新潟</td>
<td>162</td>
<td>86</td>
<td>76</td>
<td>5.9</td>
<td>37</td>
<td>愛媛</td>
<td>105</td>
<td>59</td>
<td>46</td>
<td>5.1</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>富山</td>
<td>190</td>
<td>105</td>
<td>85</td>
<td>7.5</td>
<td>38</td>
<td>高知</td>
<td>100</td>
<td>58</td>
<td>42</td>
<td>5.5</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>石川</td>
<td>176</td>
<td>93</td>
<td>83</td>
<td>6.8</td>
<td>39</td>
<td>福岡</td>
<td>114</td>
<td>66</td>
<td>48</td>
<td>5.0</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>福井</td>
<td>158</td>
<td>99</td>
<td>59</td>
<td>5.3</td>
<td>40</td>
<td>佐賀</td>
<td>122</td>
<td>72</td>
<td>50</td>
<td>5.0</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>山梨</td>
<td>138</td>
<td>76</td>
<td>62</td>
<td>5.3</td>
<td>41</td>
<td>長崎</td>
<td>99</td>
<td>56</td>
<td>43</td>
<td>4.4</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>長野</td>
<td>146</td>
<td>73</td>
<td>73</td>
<td>6.0</td>
<td>42</td>
<td>熊本</td>
<td>103</td>
<td>58</td>
<td>45</td>
<td>4.4</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>岐阜</td>
<td>161</td>
<td>93</td>
<td>68</td>
<td>6.4</td>
<td>43</td>
<td>大分</td>
<td>104</td>
<td>54</td>
<td>50</td>
<td>5.1</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>静岡</td>
<td>116</td>
<td>59</td>
<td>57</td>
<td>5.2</td>
<td>44</td>
<td>宮崎</td>
<td>88</td>
<td>48</td>
<td>40</td>
<td>4.2</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>愛知</td>
<td>154</td>
<td>85</td>
<td>69</td>
<td>6.3</td>
<td>45</td>
<td>鹿児島</td>
<td>64</td>
<td>29</td>
<td>35</td>
<td>3.9</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>三重</td>
<td>126</td>
<td>71</td>
<td>55</td>
<td>5.5</td>
<td>平均</td>
<td>126</td>
<td>70</td>
<td>56</td>
<td>5.4</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料）『住宅統計調査報告』（昭和43年・1968）
注）1. 地域については北海道を除き2. 農家規模・Afは農林漁業併用住宅の延べ面積（小数1位4捨5入）3. リビング系空間・Lrは1住あたり畳数×1.65（m²/畳）（小数1位4捨5入）4. サービス系空間・SrはAf−Lr 5. 室数・Nrは小数2位4捨5入 6. 1室あたり畳数・Tfは小数2位4捨5入
の絶対量の差もさることながら全住空間に占める比率（配分率）の差も注目される。

2.4 農家固有のサービス系空間

農家は一種の併用住宅であるから、サービス系空間の中に併用部分（ドアなど）を含んでいる。これはもちろんサービス系空間ひいては住居規模そのものを拡大している。この拡大状況は専用住宅と比較することによってあきらかになる。かりに全国平均をみてても農家規模126㎡のところ専用住宅規模は72㎡で54㎡の大差がある。サービス系空間に限っても農家70㎡、専用住宅34㎡で36㎡の差がある。農家のサービス系空間量は専用住宅の約2倍もある。

もし専用住宅のサービス系空間量が生活上のサービス的機能を充足しているとすれば、農家のサービス系空間量(Sf)から専用住宅のそれ(Se)を引いた残余(Sf-Se)は併用のためのサービス系空間量と考えねばならない。すなわち農家固有のサービス系空間と考えねばならない。これをDfとすれば、Df=Sf-Seである（後出）。

また、全国45地域のDfとAfの相関を求めると、相関係数は0.7315でかなり強い正の相関がえられる。すなわち、農家規模の大きい地域では農家固有のサービス系空間・Dfもそれに比例して大きくなるということである。なお、関係式はDf=0.3750Af-11.37である。しかし、この時点（昭和43年・1968）では都市化の影響により専用住宅のサービス系空間もかなり切りつめられつつあると考えられるので大都市圏の影響すると考えられる6地域（埼玉、東京、神奈川、愛知、大阪、兵庫）を除いた39地域の相関みとると、相関係数は0.7918、関係式はDf=0.3613Af-11.64となる。やはり相関度はすこし高くなっている。

こうした農家固有のDfは一層て風土的と考えられるので、前節でみた秋冬降水量との相関地域26地域から上記の都市化地域3地域（埼玉、東京、神奈川）を除いた23地域についてAfとDfの相関を求めると、相関係数は0.8641、関係式はDf=0.2692Af-2.60となる。同じようにして冬季気温との相関地域19地域から都市化地域3地域（愛知、大阪、兵庫）を除いた16地域のAfとDfの相関を求めると、相関係数は0.8625、関係式はDf=0.5214Af-28.35となる。

以上から、農家規模（Af）の風土性はサービス系空間量（St）および農家固有のサービス系空間量（Df）にも同様に反映されているということがいえる。逆にいえば、風土的サービス系空間量（St）の大小が農家規模（Af）の大小に大きく影響しているといえるのである。

2.5 農家・リビング系空間の風土性

サービス系空間についてリビング系空間の風土性についてみる。まず、リビング系空間全体の空間量（Lf）についてみると、全国45地域の平均は56㎡で農家規模126㎡の44%に当る。サービス系の空間量70㎡（56%）をやや下まわる量である。

全国45地域のリビング系空間量（Lf）と農家規模（Af）の相関を求めると、相関係数は0.8571で
ひじょに強い正の相関を示し、関係式は \( L_f = 0.4029 A_f + 5.25 \) である。リビング系空間量もサービス系空間量と同じように農家規模に比例して増減する。

次にリビング系空間は居室によって構成されるので、室数（\( N_f \)）についてみると、全国45地域の平均は5.4室であるが最大は富山の7.5室、最小は鹿児島の3.9室で3.6室の差がある。規模の大きい農家では室数も多いことが予想されるが、事実農家規模（\( A_f \）と室数（\( N_f \）の相関を求めると、相関係数は0.8049、関係式は \( N_f = 0.0238 A_f + 2.35 \) となる。農家規模と室数はよく正の相関性を示している。

室数の次に室規模（1室あたり畳数・\( T_f \）についてみると、まず全国45地域の平均は6.3畳で、最大は富山の7.8畳、最小は鹿児島の5.5畳である。室規模にもかなりの差があり、多雪地域の大阪（ヒロマの存在が大きく影響）、恵那地域の小室がみてとれるが、農家規模（\( A_f \）と室規模（\( T_f \）の相関を求めると、相関係数は0.5393、関係式は \( T_f = 0.162 A_f + 4.29 \) となり、室数ほどの強い相関性を示さない。

以上のように、室数と室規模は比較すると、室数の方にウェイトがおかれていて、室規模は二次的なものと考えられているようである。室数の必要性は、農家の場合大なり保守的な要素もあり、祭祀空間としてのプツマ、儀礼空間としてのザシキ、あるいはそれにづくツギノマ等の要請もあって、また実生活面では就寝隔離のための複数のネマ、冷所の合理化のためのヒロマの分割等が考えられる。こうした室数増加は主として戦後の所産であり、資料の調査時点（昭和43年・1968）では上記の諸現象がかなり明確ならたちをとって現われているとおもえる。

2.6 ヒロマ型民家のヒロマと諸室

レビング系空間の風土性は、先にあげたヒロマ型と田字型の民家型と大きくかかわってこよう。ヒロマ型民家の分布地域は、東北・北陸地方であった。具体的には青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、群馬、新潟、富山、石川、福井の11地域である。また、ヒロマ型と田字型の混在する地域が7地域（茨城、栃木、長野、岐阜、滋賀、京都、兵庫）ある。その他の27地域が田字型地域である。

ヒロマ型地域はヒロマのせいで田字型地域よりリビング系空間も大型化していると考えられるが、いまヒロマ型地域１１地域と田字型地域27地域の住空間諸量の平均値を表示すると表1-3のようになる。まず、リビング系空間量を示す全量数についてみるとヒロマ型42.4畳、田字型30.6畳でヒロマ型の方が11.8畳大きい。約12畳の差が出ている。この12畳がすなわちヒロマ面積に相当するか否か。

そこでヒロマ型民家の住空間構成を考えると、ヒロマと諸室（プツマ、ザシキ、ネマ等）の構成になり、この諸室は田字型民家の室（諸室）と大きな差がない。また、ヒロマ型民家のにおけるヒロマは1室で大きさは諸室2室分に相当するので、この関係からヒロマの面積、諸室数、諸室
まず全体の室数（NF）をみると、ヒロマ型5.9室、田字型5.1室でヒロマ型の方が0.8室多い。この約1室がヒロマ1室に相当するであろうことは容易に推定できる。次にヒロマ面積（HF）を算出すると12.3畳で先のリビング系空間の差11.8畳はほぼ見あう。ヒロマをもつヒロマ型民家の大型化の主因はやはりヒロマにある。

次にヒロマ以外の諸室について室数（NF）を求めると、ヒロマ型4.9室、田字型5.1室で両者とも5室ではほぼ等しい。すなわち、ヒロマ型ではヒロマ1室と諸室5室の合計6室でNFの5.9室とよく一致する。田字型ではヒロマはなく諸室5室のみであるから室数は5室であり、NFの5.1室とよく一致する。次に諸室の規模（TF）についてみると、ヒロマ型6.2畳、田字型6.0畳でほぼ一致する。なお、諸室規模については多少ヒロマ型の方が大きい可能性がある。

以上からヒロマ型と田字型を比較すると、リビング系空間の差はあきらかであり、ヒロマ型民家ではヒロマ1室（約12畳）分が田字型民家より大きく、その他の諸室はヒロマ型、田字型に共通し5室（1室あたり6畳）を保有する。以上がヒロマ型のリビング系空間の風土性であるが、

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1-3 ヒロマ型民家の住空間諸量</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>NO. 地域</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
</tr>
</tbody>
</table>

ヒロマ型平均 | 152 | 42.4 | 5.9 | 7.2 | 12.3 | 4.9 | 6.2 |
田字型平均 | 116 | 30.6 | 5.1 | 6.0 | - | 5.1 | 6.0 |

資料）表1-2に同じ
注）5.～7.は筆者算出
このような視点はヒロマ型地域（11地域）と田字型地域（27地域）のマクロな比較であるが、より具体的には本論の対象とする加賀・農村住居の実態がこのことを示しているであろう。

3．亜熱帯型民家の住空間

3.1 小型化住空間の伝統

北陸地方の多雪型民家の対極的な民家は亜熱帯型民家である。先に引用した農家規模においても両者の差は歴然たるものがあった。北陸4県の農家規模は、新潟162㎡、富山190㎡、石川176㎡、福井158㎡であった。他方、亜熱帯型民家の影響を受けて南九州地方では、鹿児島64㎡、宮崎88㎡であった。本論の対象としている加賀・農村住居に関連する石川176㎡は鹿児島64㎡の2.75倍で3倍に近い。

この差のよってくるところは、基本的には住居のシェルター的役割の多寡にあるであろう。より具体的といえば、住生活における戸外空間の利用度、住空間の1棟集約化の度合等である。本節ではそのような状況をあきらかにするために亜熱帯型民家の住空間構成をみていただき。資料は、野村孝文『南西諸島の民家』（相模書房、増補版、昭和51年、初版昭和36年）である。

同書（PP.33-77）には南西諸島の民家平面が数多く採集されているので、まずはその住空間構成の実態を図1-3に示す。全60例である。亜熱帯型民家は総じて小型を特色としており、それは先の鹿児島の64㎡にも現れていたが、もちろん亜熱帯型民家の中にもそれなりに規模の大小が存在する。60例中最小の民家は2.0×2.0間（4坪、13㎡）で最大は38.5坪（127㎡）である。

このような気候風土的条件の一定の地域における規模差は、いちおう階層差ということになるが、しかし、その階層差は歴史的に生成されるものである以上そこには住空間の古式から新式への発展過程もとめられる。図1-3は60例を規模の小から大へ配列しているのでそこにはおのずから歴史的発展過程が現われているはずである。次項ではそのあたりを概観しておきたい。

3.2 小検分立の多棟構成

南西諸島民家の特色は、小検分立の多棟構成にある。もっとも発達した居住棟の構成は、トウグラ、トコラ、トウラ、トグラ（外倉か）あるいはカマヤ（釜屋）とよばれる炊事棟とウイヤあるいはイヤ（居室）とよばれる生活棟、オモテ（表）あるいはオモテヤ（表屋）とよばれる接客棟の3棟である。これらの居住棟に付属屋を加えると、さらに棟数が増し多棟化する。

3棟の居住棟カマヤ、イヤ、オモテヤは隣接して建てられるが棟相互の連絡は戸外空間となる場合もあり、またドカ（廊下）とよばれるローカでつながれる場合もあり、さらに鹿児島や宮崎では1棟化されている例もみられる。亜熱帯的気候風土のもとでは居住棟の1棟化は多雪地域のように必要でなかったであろうが、いまひとつは構法の問題もからんでいた。
凡例）

△ ドナ

オエ 8 室家具

B 仏壇

C 押入、置物

E オン

F フロ

G 玄関

K 台所

S ローカ

T 床の間

U 床間

V 神棚

W 便所

注）図は床面積の大小から配列し、Noを付している。

— 20 —
南西諸島民家は基本的にはナカバシラ（中柱）構造によっている。平面の中心に中柱を建てその頂部に向けてタルキ（桟）をかける構法で平面は正方形になる。この構法では多雪地域で発達した平行サス構造のように住空間をおおうように拡大することができなかった。そのため小棟分立の多棟構成とながらざることなく、その由来は自生する樹木にまわりからタルキ（丸太や太い枝）をさしかける原始的構法にあるとももえる。

このような中柱構法によるかぎり平面の形状や規模はおのずから決定され、2.0～4.0間程度の正方形平面となりざるをえない。もし、住空間を拡大するとすれば中柱を何本か建て桟木を渡してタルキをかげる棟持柱構法に移行するしかしかなかったが、風土の条件からその必要性もなかった。むしろ、亜熱帯気候のものでは機能に応じて棟をわける方が有利であった。

カマヤのように火を使用するところでは、熱気や排煙のためにイヤとは分離する方が望ましい。おそらく、もとは炊事は戸外でおこなわれていたであろう。カマヤの成立は当地の民家発展過程の一プロセスと考えられる。その意味では当地の民家の雑種はイヤにあるであろう。戸外の炊事場にシェルターを築いたものがカマヤである。他方、オモテヤはいわばハレ（晴）の空間で階層的には上層、歴史的には後代の末裔である。中心となるイヤはカマヤとオモテヤの中間に位置するところからナカヤ（中屋）ともよばれる。

3.3 1棟構成の場合

1棟構成はイヤのみの住居である。このイヤについては、前出『琉球地方の民家』（PP.69～70）に次のようにある。

琉球地方では、たとえば沖縄島勝連村平安名のように明治中期頃までは土間に薬や茅などを敷いてその上にニクブク（薬製席）を敷くだけで生活していた全土間式の土座住まいが80％もあり、明治中頃までは全琉球にかなり多くの土間住まい（土座住まい）があったものと考えられる。いまも琉球列島には転ばし根太のゆかや自然石の上に根太を渡すゆかがあって、ゆかは極めて低く、床戸式へとかわっていくのである。

この論述をみると、亜熱帯的気候風土をもつ沖縄においてももとは土座ずまいで、それは明治期にまで及んでいる。これは本土の場合と同様であり、その後の低床から揚床（引用文の高床）への発展も全く同様である。おもしろに、床形式からみると日本列島のどの地域もほとんど同様の発展過程をへている。高床式のタカクラ（高倉）をもつ当地方においても一般的庶民住居はながら土座であった。

本論第Ⅱ巻で扱った豪雪地域の白山・山村住居や本第Ⅱ巻の加賀・農村住居もながらく土座ずまいを伝統としてきた。すくなくとも日本列島においては、気候風土にかかわらず土座の単室
住居が初期的な姿である。低床にしつる床にしろ床張りという建築行為は一定の発展段階に達しないと現われないのである。

さて、先に示した60例の西南諸島民家のうち1棟構成のものは15例ある。この15例は他の例と同じようにすでに床張りがかなり進行しドマが少なくなっているが台所部分に火処との関係で多少のドマ空間が残っている。単室住居の場合、屋内の一角に火処のドマを設け他の部屋を土座にして起居のスペースとしていたのである。土座部分は低床から揚げへと移行していく。それと同時に室分割も進行する。

この1棟型15例の平均規模は50㎡で先の鹿児島の64㎡よりかなり小さいのはその下層性を示しているのであり、2棟構成から3棟構成と上層化するにつれととうぜん平均規模も大となっている。ちなみに、2棟構成の平均規模は63㎡、3棟構成のそれは77㎡である。

1棟型は先に述べたようにイワのみの住居であるから平均規模も3タイプ中最小になるのはとうぜんであるが、しかし、1棟型には1棟型なりの発展型があり、カマヤを下屋として付属するものや起居スペースが発展して2~3室となる場合もある。その結果として1棟型の平均規模は上記のように50㎡となっているが、その内訳は次のようなである。

まず50㎡のうちサービスス空気は22㎡（44%）、リビング系空気は28㎡（56%）となる。サービス系空気22㎡の内訳は①台所スペース10㎡（うちドマ面積は5㎡、残り5㎡は床張り部分）、②エン・ドエン10㎡、③その他収納スペース等が2㎡である。フロ・便所等は戸外の別棟である。こうしてみると、サービス系空間の約半分は台所、残り半分はエンであり、亜熱帯的気候におけるエンの発達が注目される。

他方、リビング系空気28㎡の内訳は、いまだもなく居室が大半であり僅少量が床の間、床脚、仏壇、神棚に当てられる。平均室数は2.7室、1室あたりの壁数は6.0壁である。これらの値から少室、小室の南方系住居の特質がうかがえるが、とくに1棟型ではその傾向がつよい。

3.4 2棟構成の場合

2棟構成はイワとカマヤの構成である。この2棟はとうぜん隣接して建てられているが分離している場合とリーカ（渡り廊下）によって連結されている場合があり、後者が進展すると平面上は1棟の建物のようにみえる場合も生ずる。また、イワにカマヤを下屋として付属させる場合もあり、この場合のモヤと下屋の関係は白山・山村住居にみられたモヤとサシカケの空間構成に類似している。

2棟構成の中心となるのはイワで、炊事棟のカマヤはいわば副屋である。西南諸島においてはカマドを屋外の露天に設けるものもみられるから、これに屋根を架けて1棟としたものがカマヤであろう。前出『日本農民建築・第4輯』（P.170）には外カマドについて次のような記録がある。
宅地内の配置図に示す様に、宅地内には母家の下を手横に高倉があり、その背後の石垣の垣根に釜があるが、釜を釜、ヘッツイサマ、ホド等と称して居る。私の調査した日は釜をかけ蒸籠を上に置いて正月の餅を作って居った。

この事例はやはり亜熱帯的気候風土をもつ屋島の事である。やはり外カマドの例である。オモヤに付属するカマヤは下屋になっており、これをハリタ（張り出し）とよんでいる。火處として釜が切られているが、これをカマドとよんでいる。この例のみならず亜熱帯的気候風土のもとでは、住生活にかかわる火灶がいくつかに分散しており、その歴史的発展過程をもつまえて遠望すると、(1)屋外釜、(2)屋内釜、(3)屋外カマド、(4)屋内カマドと考えられる。

上の事例では(2)と(3)の火処をもっているが、その他にもいくつかの組合わせが考えられる。さらに、(4)屋內釜、(5)屋内カマドがカマヤにあるかイヤにあるかによってもその時代性が異ってくる。この時代性にさらに階層性が加わってくるので話しはそこし複雑になるが、下層をより前時代的と考えれば火処の形成（釜かカマドか）および位置（屋外かカマヤかイヤか）によってすくなくとも発展過程の段階は特定されよう。

そして、釜にしろカマドにしろ火処は屋外から屋内へ移行していき、屋内ではカマヤからイヤに移行していくから、火処からみた発展段階は、I．屋外釜、II．イヤ屋内釜、III．屋外カマド・イヤ屋内釜（以上、1棟構成）、IV．カマヤ屋内カマド・イヤ屋内釜、V．イヤ屋内カマド・イヤ屋内釜の5段階となる。カマヤが別棟かモヤの下屋になるかによって住空間的には多少意味合いが異ってくるが、これはIV段階の中の細分類である。本項の2棟構成タイプはこのような観点からみると第IV段階に位置するものである。

以上のようにカマヤ、イヤの2棟構成が基本的な2棟型であるが、いまひとつの2棟型がある。それはカマヤをイヤと一体化した1棟とオモテヤとよばれる接客用の1棟から成る2棟型である。この場合、前者のカマヤつきイヤをナカヤ（中屋）とよんでいるのでその呼称を採用すれば、ナカヤ・オモテヤ2棟型となる。すなわち、2棟構成はカマヤ・イヤ型とナカヤ・オモテヤ型の2種類になる。

このような2棟型は、例示した全60例中36例でもっともも多く標準的なものといえよう。この36例の平均規模は63㎡で鹿児島の64㎡とよく一致し、規模的にも標準的であることがわかる。さて、この平均規模63㎡の内訳は、まずサービス系空間25㎡（40%）、リビング系空間38㎡（60%）で1棟型よりやリビング系の割合が多くなっている。ナカヤ、オモテヤともに居室が多くなっているからである。

2棟型の合所スペースは11㎡で、1棟型の10㎡とはほとんど変らず、またエン・ドエンも9㎡で異動がない。2棟型が1棟型と異なるのは2棟をつなくローカ、収納スペース合わせて4㎡が多いことである。室数は3.9室で1棟型の2.7室より1.2室多い。室規模は5.5畳で1棟型の6.0畳より小室化している。室規模よりも室数の増加を重視していることがわかる。
3.5 3棟構成の場合

3棟構成は、カマヤ、イナ、オモテヤの3棟より成る。いままでの1棟型、2棟型に比べて、オモテヤ1棟が多いから、平均規模も77㎡と最大である。オモテヤは、先にも述べたように接客用の座敷を1棟化したものをハレの空間である。オモテヤのある住居は時代的には新しく、また階層的には上層に属する。

3棟型は全60例中9例で、1棟型よりも少ない。この少数性がとりもなおさず上層性を示している。平均規模77㎡の内訳は、サービス系空間が77㎡で、1棟型の22㎡、2棟型の25㎡に比べやや大きいが大差があるわけではない。サービス系空間の内容についてみると、まず台所スペースは10㎡で1棟型の10㎡、2棟型の11㎡と同等である。いわばカマヤの規模は3型を通して固定されており、旧態を温存しているといえる。

エン・ドォンのスペースは11㎡で1棟型の10㎡、2棟型の9㎡と変わりない。サービス系空間の差は棟間をつなぐローカと収納スペースによって多少増加しているにすぎない。もともと、亜熱帯の気候風土のもとでは、居住空間のサービス的機能が大きく住空間量への影響がすくないのである。これに対して寒冷地に生まれた地域においては、サービス系機能をも含む空間に組み込む結果、そのスペース量は住居規模に相応して増加するのであろう。ちなみに、本家舎民家のサービス系空間の全住空間に占める割合は、1棟型44％、2棟型40％、3棟型35％と低率化している。

他方、リビング系空間は50㎡で、1棟型の28㎡、2棟型の38㎡に比べて断然大きい。南西諸島民家の規模差は一義的にリビング系空間の差によって生じているといえよう。室数は4.9室で、1棟型の2.7室、2棟型の3.9室に比べて相対的に多室である。室規模は6.1㎡で1棟型の6.0㎡、2棟型の5.5㎡と比べて大きな差はなく、室規模よりも室数を主観としていることがわかる。これは全国的に共通する傾向である。

3棟型は、他の1棟型や2棟型に比べて上層の住居であり、またそのことによって規模も大きいが、サービス系の空間量は大差なく、ときに台所スペースはほとんど等しい。規模差の生じるのは室数であり、小棟分立の多棟構成の中で室機能の分化を追求してきたことがわかる。

3.6 亜熱帯型民家の住空間の特質

以上、南西諸島民家を1棟型、2棟型、3棟型それぞれについてみてきたが、ここでは全体を通しての空間的特質を含んだところをみておきたい。南西諸島民家にみられた小棟分立の住空間構成は、亜熱帯的気候風土における戸外空間を含めた全体的な構成が基本である。例示した60例もそのことをよく示しており、イナのみの1棟型、カマヤ・イナの2棟型、カマヤ・イナ・オモテヤの3棟型があった。

全60例において、棟数型は1棟型15例（25％）、2棟型36例（60％）、3棟型9例（15％）である。もちろん、この60例は民家調査が目的であるからあまり統計的に処理することは危険であるが、
各タイプが採集されておりその分布状況もかなりよく母集団を反映していると考えられる。

その証拠に、民家規模（全床面積）の平均は61㎡で鹿児島の64㎡にきわめて近い。また、平均室数は調査例では3.8室、鹿児島3.9室ではほとんど一致する。また、平均室面積は調査例5.8㎡、鹿児島5.5㎡でこれもほぼ一致する。この事実は、鹿児島から南西諸島にわたる亜熱帯型民家の特質を示すものであり、日本列島における一方の典型的民家型ということができる。他方の典型的民家は、いすまでもなく北陸地方に代表される多雪型民家である。

さて、亜熱帯型民家の平均規模61㎡の内容は、サービス系空間24㎡（39%）、リビング系空間37㎡（61%）で割合としてはリビング系空間がサービス系空間を上まわる。同時に、鹿児島の場合はサービス系空間29㎡（45%）、リビング系空間25㎡（55%）でやはりリビング系空間の割合が上まわっている。他方、多雪地域の石川では平均民家規模176㎡のうち、サービス系空間は93㎡（53%）、リビング系空間は83㎡（47%）でサービス系空間の方が割合が大きい。多雪型民家では民家規模も大きいが、サービス系空間に費される空間量はリビング系空間のそれを上まわっているという点が重要である。

このように亜熱帯型民家はもともと小規模であるが、ことサービス系空間に配分される空間量はリビング系空間に比して少ないものでありその面積は24㎡（14.7畳）にすぎない。さらにその内訳は、台所11㎡（6.5畳）でドマ部分と広げられるが折半する。次に出入されているサービス系空間はエン（少量のドアを含む）の9㎡（5.8畳）で、残り4㎡は構造をつなぐローカ2㎡、タンク、物入れ等の収納スペース2㎡である。

その他のサービス系空間、玄関、便所、フロ等はひじょうに僅少である。玄関はほとんどが戸外からエンに異なった形式をとっており、多雪型民家にみられるソト玄関（防雪空間）とウチ玄関の2重構造のような玄関は皆無である。多少玄関らしいスペース求めても60例中7例（12%）にすぎない。また、便所は戸外に別棟としているが多くのオモニ便所を付属するものは60例中4例（1%）にすぎない。さらに、フロは60例中1例をのみとめるにすぎない。

次にリビング系空間37㎡についてその内容をみる。リビング系空間は、いうまでもなく大半が居室で占められるが、先にふれたように平均床面積は3.8室、平均室規模は5.8畳である。少室小室型の民家であり、多雪型民家のヒロマに相当するような室はみられない。60例の室を規模別にみると、全227室の内訳は2畳5室、3畳28室、4畳20室、5畳42室、6畳61室、7畳10室、8畳44室、9畳4室、10畳7室、11畳4室、12畳1室、14畳1室（10畳未満4室）となる。

5畳未満の小室が42%、6畳から10畳までの中型の室が56%、11畳以上の大型の室は3%である。全体として小型の室に傾斜しており、2畳から8畳までの室が全体の93%を占める。また、民家規模が大きくなっても室規模は大きくならず、その場合は室数が増加する。これも多雪型民家との相違点である。